

様式第2号

視察研修先	新潟県魚沼市	氏名	野口康一郎
視察研修項目	学校再編に係るスクールバス導入・広域運営等について		
【視察先概要】 魚沼市は新潟県の南東部に位置し、平成16年11月に6つの村や町が合併して誕生した街。国内有数の豪雪地帯でもあり、日本有数のブランド米「魚沼産コシヒカリ」の産地としても有名。人口約3万1千人。 【視察内容】 本市でR12年開校予定の統合中学校に初めてスクールバスが導入される予定。魚沼市において広域通学に対応したスクールバスの運行を行っている現状と課題を伺った。 【感想・所見】 平成の大合併により6つの町村が合併しているため、街の面積が946.93km²と、とても広大で徒歩通学が難しい地域が多く存在しているとのことだった。本市と同様、自家用車への依存が高く、公共交通の利用者は減少傾向にあるとのこと。学校統廃合により、徒歩通学だった生徒がスクールバスを利用する事によりメリットが多く挙げられていたが、委託業者には人手不足や人件費の高騰、物価高による経営上の課題も多く挙げられていてこれからの維持が課題だと感じた。 国の基準では小学生は4km以上がスクールバスの基準とされているが、魚沼市では以前は2.5km以上が乗車範囲で、現在は1.5kmからが乗車範囲と変更されていた。理由としては近年の猛暑とクマ対策とのことで子ども達の安心安全に繋がっていると感じた。保護者による送迎負担の軽減、交通事故や夏の熱中症対策としても効果が得られているようだった。 魚沼市では市有バス13台、民間バス3台、計16台で運行しているとのこと。現在は小学校8校・中学校5校あるとのことだが、今後小学校4校・中学校1校に統合する計画もあるとのこと。 魚沼市の場合は5つの中学校で今年度5月現在683名のうちスクールバスの利用者は82名とのことで、約12%が利用しているようだった。本市がこれからスクールバスの乗車範囲をどのように設定するかによって利用する生徒数が変わるが、バスの台数、冬期間の運行など多くの事をシミュレーションしていかなければならないのではないかと感じた。実際の運行後も試行錯誤が必要になると感じる。 スクールバスと左沢線を利用して登下校させることが私は良いのではないかと考える。西部地区は羽前高松駅、南部地区は南寒河江駅までの送迎をすることで、混雑の緩和とJRの利用促進に繋がるのではないかと考える。それに既存の公共交通を利用した方が財政負担も軽減されるのではないだろうか。			

様式第 2 号

視察研修先	新潟県十日町市	氏名	野口康一郎
視察研修項目	大地の芸術祭における廃校利活用（アート・宿泊、交流施設）の経緯や地域活性化等について		
【視察先概要】 十日町市は新潟県の県南に位置し、平成 17 年に 5 市町村が合併して誕生した街。世界最大級の国際芸術祭を開催していて国内の地域芸術祭の先駆けと言われている。人口約 4 万 5 千人。 【視察内容】 合併により廃校となった場所を利活用してアートを媒介にした地域おこしを始めた先進的な地域。本市でも廃校の跡地利用については考えていかなければならないため、芸術による地域活性化を学ばせていただいた。 【感想・所見】 2000 年より 3 年に一度トリエンナーレ方式で開催されている「大地の芸術祭」の第 3 回目より廃校の利活用を始めたとのこと。人口減少、少子高齢化が進む集落で廃校となってしまった場所を価値ある場所に再構築された事は素晴らしい事だと感じた。何よりも市職員の方々の熱意と地域住民の方々が外部から来た地域おこし協力隊や芸術家の方々を地域に受け入れて一緒にコミュニティを形成する体制は素晴らしいと感じた。平成 21 年度から 17 年間合計 114 名の地域おこし協力隊がいるとのことだが、退任者の 74.2%の方々が定住しているとのことで、芸術に特化した事で生まれた効果なのではないかと感じた。地元の方々が自分事と捉え、生きがいとして行政と共に自分たちの役割分担を果たしているのは見習うべき事だと思う。 現地視察させていただいた、「鉢&田島征三 絵本と木の実の美術館」は十日町駅から車で約 20 分の場所にある集落だったが、平日にもかかわらず観光客の方々が見学に訪れていた。「駅周辺だからついでに寄っていこう」という訳ではなく、その場所が目的地となるようになっていた事が素晴らしいと感じた。 廃校をどう使うかは、行政主導で一方的に観光開発するのではなく、やはり地元の方々の声を丁寧に聞きながら当事者意識を持ってもらいながら一緒に進めて行く事が大切だと感じた。地元の方々が望むもの、協力したいと思うものにするべきである。 2000 年から始まった芸術祭は回数を重ねる度に参加する集落、アーティスト、訪れる来場者も増えているとのことで素晴らしいと感じた。最初は期待されない事もあったかと思うが、続けていけば協力してくれる方も増えて行くし、話題にもなり訪れる方も増えて行くのだと感じた。「継続は力なり」なのだと思う。 本市でも、芸術祭を開催する予定となっているが、地元の方々がどのような事を望むのかを一緒に考えて、合意形成のうえ実施して欲しいと思う。			

様式第 2 号

視察研修先	新潟県長岡市	氏名	野口康一郎
視察研修項目	子育てと防災の複合拠点施設の開所経緯や実情、役割について		
【視察先概要】 長岡市は県のほぼ中央に位置し、県内第 2 の都市。日本三大花火大会「長岡まつり大花火大会」やお米、日本酒の名産地として知られている。人口約 25 万人。 【視察内容】 新潟県中越地震や中越沖地震の教訓から防災意識が高く、子育てと防災の複合拠点施設「子育ての駅ぐんぐん」や多くの子育ての駅を開設し子育て支援に力を入れている。限られた財源の中で施設の複合化はこれから必要になると考える。現状を伺った。 【感想・所見】 雨の日や雪の日でも、子どもをのびのびと遊ばせることのできる子育て支援施設が必要との声を受け、公園の中に屋根付き広場と子育て支援施設を一体的に整備し、保育士が常駐している全天候型公園施設を全国で初めて整備した自治体。2 度の大きな地震の経験時、子育て世代が孤立している状況を踏まえ、子育てと防災拠点を複合化させた「子育ての駅ぐんぐん」を平成 22 年に整備。この度現地視察もさせていただいた。 3 ha の広大な公園の中に、本市の「ゆめは一と寒河江」のような施設が併設されていて、伺った日は平日だったが赤ちゃん連れのお母さん達が交流をされていた。日常的には親子の孤立を防ぐための交流の場所だが、災害時には福祉避難所として使用することのできる、フェーズフリーの考え方が素晴らしいと感じた。消防本部も併設されていて、停電時にも電気や水が止まることのない施設は赤ちゃん連れのお母さん達からすると、とても安心できる施設なのではないだろうか。 本市でも現在まで、数日間大勢の市民の方々が避難されるような、大きな災害が起きていないが、災害はいつ起きるかわからないので、やはり備えは必要になってくると考える。特に赤ちゃんを連れた世帯には配慮が必要になってくると感じるので、この度視察させていた「ぐんぐん」のような施設は本市でも必要と感じた。 本市ではハートフルセンターに避難することはできるが、シャワーはなく、停電時の電源も最低限のもののようなので備える必要があるのではないかと感じる。普段から利用する施設が有事の際に避難施設として開所されれば、避難しやすくなるだろうし、その場所に行けば保育士もいるとなればより安心感が得られるだろう。 6 月の一般質問で、本市にもフェーズフリーの施設が必要ではないかと提案をさせていただいた。限られた財源の中でどのように配置するかは検討しなければならないが、今後は複合化で今あるリソースを有効活用することが求められてくると考える。			